

## 大平正芳氏とキリスト教

鈴木 秀子

「人さまの前で誇れるような信仰ではないが、聖書から離れて生きることができない。祈りの中で神さまとの対話は続けている」（「キリスト新聞」一九六七・二・二五でのインタビューに答えて）。

首相就任当時、「クリスチャン宰相」と呼ばれた大平正芳氏は、海外から高い評価のあつた政治家だつた。それは、欧米の人たちとの間に、キリスト教という共通の基盤を持つていたということだけではない。それは、政治の中に人間を生かし光を当てる源泉のようなもの、いわゆる哲学を持つていたからだと指摘する人が多かつた。その源泉こそが、彼が若い頃から打ち込み親しんだキリスト教ではなかつたか。

### イエスの僕会から聖書を通しての信仰へ

彼が初めてキリスト教に触れたのは、昭和三年（一九二八）旧制高松高商への入学直後のことだつた。

それは、「イエスの僕会しもべ」という、当時、全国的な活動を繰り広げていた伝道集団の主宰者佐藤定吉氏の講演を聞いたことがきっかけだつた。

『大平正芳回想録・伝記編』に、次のように記されている。

「前年に父の死を経験し、厳しい生活環境の中から笈を負つて出てきて、都会高松の刺激に満ちた

新しい環境の中で、それまでおよそ思想とか宗教とかに触れる余裕のなかつた十八歳の正芳は、魅せられたように、この佐藤の嘖きだす弁舌の嵐にまきこまれた。そして、少なからぬ学生たちとともに佐藤の門をたたき、『使徒』の一人となることに意を決した。『野戦』と呼ばれた路傍伝道に、十字架のついた提灯を持って参加し、自ら街頭でイエスの導きを説くようになった。また、休みの日には、同じくイエスの僕会の会員の下宿に集まり、互いに人生や神について語りつつ、祈祷や信仰告白を行うようにもなった。

翌年、軽い湿性肋膜炎にかかり、休学した。「私は毎日のように、近くの山に登るのを日課としていた。肋膜炎は幸いに快方に向かった。その間、漱石の小説を読んだり、内村鑑三先生の著作に親しむことができた」(『私の履歴書』)。

『回想録』は、この間の大平氏の心境について「自分でもまったく思いもかけずに、熱烈なキリスト教運動家になってしまった若者が、それまで考えていた人生進路や信じていた価値観を大きく動揺させたとしても、これはごく当然のことと言えるだろう」としている。さらに、友人たちの話から、休学のこの時期、大平氏は内村鑑三といったキリスト教関係の本ばかりでなく哲学やエッセイをむさぼるように読み、一部の友人たちに自分の思索を語った手紙を書き送っているとも述べている。そして、その年(一九二九年)十二月二十二日に観音寺教会でブナカン牧師により洗礼を受け、正式にキリスト者としての歩みを始めた。

大平氏は高商卒業後、科学者でもあった佐藤定吉氏の開発した薬品を販売して「僕会」の活動費用に当てようと、しばらく大阪で会社勤めをしている。しかし、このもくろみは実を結ばなかった。このため、育英資金を得て、東京商科大学(現一橋大)に進むことになった。ここでも、YMCAの寮建設で資金集

めに奔走するなど、キリスト教との関わりは続いてきたが、大阪時代から著作を読んで傾倒していた矢内原忠雄氏の聖書研究会に参加したり、賀川豊彦氏の聖書講義に出たりしていたことから、聖書を通して信仰を深めることに、より重点を置くようになったようだ。

彼自身は、『私の履歴書』にこう記している。

「イエスの僕会の（佐藤先生の所説は、われわれに神に対する畏れの念を植えつけるのには役立つが、その神がなぜ『愛』かについては、どうしても納得のゆくものではなかった。そのためには、キリスト教の教えをまたねばならなかった。したがって僕会の人々も、その後、キリスト者としての道を歩んだ人が多く、先生の科学と宗教についての論説は、キリスト教への呼び水の働きを果たしたものだ。私の場合も、その後、聖書を通してキリスト教に進んだ」。

また、社会に出た後、こうも述懐している。

「初期においては運動の焦点の見定めがつかず綱領自体に清算さるべきものもあつたので、何かしら地につかない突飛な相貌を呈していたかもしれない。或は当時の学生層に食い入っていた一般的な不安を、こういった側面から発散させようとする一つのもがきとして一般に受取られていたかもしれない。しかし、ともかくこの群は一つの異様なセンチシオンを校の内外に捲き起こし、相当優秀な学生の多くを自己の陣営に迎へていた。そして彼等は抑へ難い内面的闘争と清算の過程を辿って、或者は基督教の正統に導かれ或者はこれを捨てて行った」（『又信』十四号、昭和十三年八月三十一日）

若き日の熱狂的な傾倒から離れ、聖書を手元に引きつけて、より深くその意味を熟思するようになった大平氏の姿が浮かび上がる。

## キリスト教精神に裏打ちされた人間性

私は志げ子夫人と親しくして頂いて、二〇年近くおつき合いしてきた。その間に、大平氏のキリスト教精神に裏打ちされた人間性をかいま見たことがある。

大平家の広い居間で家族と食事をしている時、別の隅で非常に困り果てた顔をした人が何かを大平氏にお願いしているらしい様子だった。内容はわからないが、四〇分間ほど、めんめんと訴え、大平氏は椅子に腰かけながら、前かがみになって一言も言わず、聞いておられた。訴えが終わった後、しばらく沈黙していて、そして、たった一言「よしわかった。安心していい」と言われた。

私は生き返ったような表情をしている話し手を見た時、聖書の中でキリストが悩み病む人の話をじっと聞いた後、「安心していきなさい」と祝福した場面と重ねていた。人を温かく受け入れる大平氏の人柄の根底に息づいている信仰が、どの人をも大切にすることということを実践させている、と強く感じたのだった。本人とは直接、信仰について話したことはないが、大平氏と結婚することでクリスチャンになった志げ子夫人から、夫をしのぶ思い出話の中で、死ぬまで深い信仰の中で生きた大平氏の様子をいくども伺った。型にはまった信仰ではなくて、置かれた状況の中で、人を生かす、一人ひとりを人間として大切にしているということに徹した点が特にあったという。志げ子夫人も、「大平がなくなったら、聖書の中の生き方を自分の生活の中に生かすことが最大の目標」と語っておられた。それも長年、夫妻で一緒に育て上げられてきた信仰の実りであったと思う。

昭和四十七年の月刊「カトリックグラフ」四月号に、地元高松の教区司教田中英吉氏との対談「政治家

が聖書を読むとき」が収録されていて、大平氏の一生を貫いた、信仰に生きる姿が如実に伺われる。

大平 キリストの周辺に多くの人が集まったとき、彼らはキリストを中心にした神の国で自分たちがどういう役割をもつかを考えてるんですね。ところが、キリストが孤独な立場になり、世間から棄てられて最後に十字架にかけられる過程では、キリストを裏切ったりして去っていく人が出てくる。無知といえば無知ですが、この世界が神の国に変わるんだと俗っぽい夢を抱いていた人が失望したわけですね。

(しばらく絶句したあと確信に満ちた表情で) だけど、あのキリストの中に神を見てた人はおったんです。神の国はそんな甘いもんじゃなく、キリストの形相の中に、キリストの死のもとにあるんだと見てた人は、みなまっとうな道を歩いてるでしょう。一大小説ですね、聖書というのは。しかも、飾らない事実だけが書いてある。いいことも悪いことも、真実も嘘も、虚栄も実行も、ね。そういうこと、現代も変わりませんね。だから聖書を読むたびに、人間っていつも同じなんだなあ、と思ってる(笑い)。

大平(中略)そこで私たちは何をなすべきであるか、ですがね。地域社会とか職場とか小さな家庭とか、交友の人間関係の中で、回りの人を利用して財産を持つとか権力の座につこうという営みやなくて、友だちを慰めたり、わずかな持ち合わせのものを分け合って食べるとかの営みを懸命にやっっていくその姿、その中に神の国があるんじゃないですか。

(中略)だから、綱引きのようなものだと思うんです。このままだと闘争や対立ばかりが強くなって、人間的な信頼や理解の価値が失われてしまう。とめどもなく国内が乱れてしまうんです。だから何とかして失われた人間性を引き戻さなきゃならない……聖書に「汝らは地の塩たれ」とあります

……私は少なくとも地の塩的な役割を果たしたいと思うんです。だから僕はキリスト教の哲学は「永遠のいま」だと思えますよ。

厳しい現実が容赦なく突きつけられる政治の世界に生きて、聖書から不滅の知恵を汲み上げ、それを政治に生かそうとする大平氏の真摯な姿が見える。

## 長男・正樹の死とエレミヤへの共感

大平家は後継者として将来を囑望された長男・正樹を突然の病で失っている。昭和三十九年、まだ二六歳の若さだった、『私の履歴書』に大平氏自身が、「こう記している。

「彼は私にさきがけて、彼が最も慕っていた祖父とともに永久の眠りについた。キリスト教が日本に渡来のおり、若年ながら従容として殉教死したパウロ・ミキという少年があった。彼は生前いたくこの少年に傾倒していたので、洗礼を受けた際、その名をそのまま自分のクリスチャン・ネームとしていた。私は『パウロ・ミキ大平正樹』と書いた小さな墓碑を立ててやった。それは父であり友であった私の最後の贈り物となった。一冊の聖書と十字架、彼が好きであったオモチャの自動車や、病中放すことのなかった人形やレコード、そういったものを抱いて、彼は息つく暇もなく活動し続けた二十六年の有限の生涯を閉じて、別に構えられた世界に立出していったのである」

「正樹との永別。それは私が夢にだに考えなかったことである。しかるに非情にもそれは動かし難い現実となった。凡夫である私は生きる希望と情熱を失いかけた。彼はなにものにも代えられない、いわば私にとっては全部に近い存在であった。重い鉛のような悲愁が、鋭利な刃物のような力で私の

胸を刺し続けている。時日の経過によっても、その力は一向に衰えをみせない」

人にとことん親切で、父の健康を常に案じ、人知れず盲学校で代読のボランティアを続けていた、そんな息子をどれだけの思いかで見送ったのにもかかわらず、「神様はひどいことをなさる」「どうしてうちの息子だけが」「息子が生きていれば」という恨み言を、大平氏からも志げ子夫人からも、私は一度も聞いたことがない。神様のもとに行った息子に対する深い思い、敬意といってもいいような気持ちをもって、犠牲を求められた主に対して、自分の息子を差し出したアブラハムのように、一番の宝を神に捧げて、一層、神に近づいていったのである。信仰が日常の一番深いところに生きていた証拠である。

先に引用した田中司教との対談の中で、聖書の中でどれが好きかと尋ねられた時、大平氏はこう答えている。

大平 旧約だったらエレミヤが好きですね。エレミヤという人が伝えたあのペーソス……なんともいえない味があります。(中略)あのエレミヤは……なんですね……かれが考えている国家に対する愛情、忠誠心……それが現代人の参考になるもの、多いです。

エレミヤは亡国寸前のユダ王国に生きた。ある時、神に召し出されて、預言を託される。それは墮落した王国の破壊と罰を告げ、「悔い改めよ」と人々に対して迫る内容だった。当然、人々にとって甘い言葉ではなく、その反発を受けることは必至だったので、エレミヤは何とか逃れようとするが、神は許さず、「使命を果たしなさい」と預言を与え続ける。

エレミヤは、性格としては穏やかなことに向いていたのに、さまざまなつらい目にあい、「どつして私

を見捨てられるんですか」「どうしてこんな責務を与えられるのですか」と訴えたりもする。しかし、信仰を持ち続けた。生きていく上に使命を持つ人、選ばれたこのエレミヤに対して、さまざまな艱難が襲う。暗殺の危機にさえ直面し、王国の崩壊までも間近に見て、失意のうちに殺されたとも言われる。

大平氏はエレミヤに共感することが大きかったのではないか。晩年、よく志げ子夫人に「公務じゃない世界旅行に行こうな」と言われ、エレミヤのように田舎での静かな暮らしを夢見ていた。

大平氏は長男・正樹の死を契機に、政治家として一回り大きくなつたと言われる。長男の死を深い信仰で受け止めた上で、自ら果たすべき使命を悟って、その遂行に努めたのであつた。このように元首相・大平正芳氏の思想の根底をなしたものが「活きた信仰」であつたゆえに、今もって世界の多くの人たちから「日本の最高の政治家、哲学を持った政治家」と深い共感と敬意をもって想起されているのも、肯綮に当たることである。

(聖心女子大学教授)